



浦和学院高等学校では、
東日本大震災以降、

何を感じ、
何を考え、
何を行動するか!!
ライフスキル教育の原点である。

未曾有の大震災の教訓を教育の中に活かすこと。

第 64 回交流活動「一般ボランティア 追悼片付け、わかめ作業」 29.03.11~14 石巻・東松島交流センター

参加者感想文 「ボランティアに参加して」

1年W組 N. Y. (さいたま市立常盤中学校出身)

私は今回のボランティアを通して、被災地や被災者に対する考えがすごく変わりました。

初めは、復興はまだ完全とは言えず、色々な場所に瓦礫が残っていて、再生にはまだまだ時間がかかるものだと思っていたり、被災者の方々はすごく暗い感じなのかと思っていました。しかし、わたしの考えていた東北とは全く別の世界で、人々も明るく、3月12日という地震の次の日に来るという場違いな私たちのことを温かく迎えてくださったり、歩くたびに本当に色々な方が声をかけてくださり、まだ不安や辛いことも多くあるのに、それでも日々前に進んでいこうという人々の心の強さに感動しました。

普段では絶対に体験することの出来ないワカメ作業や、のり工房の見学、焼き海苔体験、マグロなどを捕りに行くために乗る漁師さんの大きな船に乗らせてもらうなど、石巻でしかすることが出来ないことを試みて、私たちの食生活を見直す大きなきっかけになったのではないのでしょうか。そして、生産の第一線を担っている人々の姿を見て、食べ物を残してしまう私達は、もっと食に対する考えを変えていくべきだと思いました。

今回体験したり聞いたことは、今後大きく役立つと思います。しかし、これをこのボランティアに参加した人だけが理解し、生活していくのではなく、より多くの人に伝え、震災の恐ろしさ、震災によって失われてしまったもの、毎日過ごしているこの日常を当たり前だと思わないでほしいと思いました。この伝えるということは、ボランティアに参加した私達にしか出来ません。私達は、東北の人々よりも今は何倍も恵まれている環境の中で生きています。恵まれている分、失うものも多いです。しかし、ここで前に進めるのが重要です。

私は、このボランティアで今の町に住んでいては絶対に分からない、現地に行くことでしか得ることの出来ない多くのことを学びました。これは、これから何年、何十年も受け継がなければなりません。まずは伝えるということからはじめ、この体験を多くの人に知ってもらいたいと思います。



震災から6年が経ちました。昨年ボランティアに行ってから被災地や震災に対する考え方が大きく変わりました。今回は前回と違う場所に行ったりして、新たな石巻・東松島のいいところを発見できました。そして、前はなかった復興住宅や野蒜駅周辺の開発が多くありました。しかし、初日に訪れた大川小学校は、何も変わっていませんでした。改めて津波の恐ろしさを感じました。昨年、震災遺構として保存が決められました。大川小学校は、実際に見ないと感ずることができないと思います。多くの人々に大川小学校を見て震災というものを考えてほしいです。

自分が一番印象に残ったのは、新たにできた堤防です。堤防は、とても高く海を見ることができません。確かに、人々の命や家を守るには必要かもしれませんが、海と共に生活している人々にとっては必要ありません。さらに、今回のボランティアで水のは何でも流してしまうと現地の人々が言っていたのが、すごく印象に残っています。災害というのは、想定外の事が起こるものです。そして、震災を経験していない子ども達が大人になって地震が来たとき、大きな堤防があるから大丈夫と安心させて、また悲劇が起こってしまうのではないかと心配になります。

決して悲しいことを感じることはありません。今回のボランティアは、地元の人々とたくさん交流することを自分の目標にしていました。今回は、第一次産業の水産業の生産者の人々とたくさん話げことができました。昨年の台風で牡蠣の収穫量が8割だめになったにもかかわらず、消費者のために仕事をしている姿には尊敬しました。また、ワカメの生産者の方は、昨年起こった地震で津波がきたにもかかわらず生産を続けました。新たにできた市場ではたくさんの人々が働いていました。我々が食べている水産物には、たくさんの人々が関わって食卓に届いていることを直接感ずることができました。日々の食べ物に感謝しなければいけません。

今回のボランティアに参加して改めて震災について考えさせられました。テレビで東日本大震災の報道は、年々少なくなってきました。人々の震災に対する意識も薄くなっていると思います。また、昨年起こった熊本地震では、自分たちは地震と関係ないと思っている人がたくさんいました。日本人なら地震の事を常に意識しておかなければいけません。そのためにも今回の地震の事を伝えなければいけません。将来自分が大学生になった時や、子どもができて親になった時、石巻に行きたいです。その時には、震災前よりもぎわった町になっているかもしれませんが、そこで起こった事実を伝え、石巻・東松島のいいところを教えたいです。





2年H組 R. Y. (川口市立南中学校出身)

私は今回初めてボランティアに参加しました。私は震災で友人を亡くし、正直とても暗い気持ちで参加しました。しかし、石巻の皆さんがとても明るく、元気に仕事をしている姿を見て、「ボランティアに来ている自分がこんなことではいけない」と思うようになりました。被災者の方々と交流し、少しでも自分の元気を分けてあげられるように、そして当時の事を少しでも多く聞き、埼玉に持ち帰ろうと思うようになりました。

大川小学校、門脇小学校など、当時の面影を残してある場所は、やはり時間が流れていないという印象を受けました。空気はとても重く、とてもチクチクしていたのを鮮明に憶えています。「ここでたくさんの方が亡くなったんだ」と思うと、頭の中がぐらりとなって体調が悪くなりました。

そして私が驚いた事は、復興が進んでいない場所がまだあるということでした。瓦礫などは無くなっていましたが、家や店は全然ありませんでした。少し山の方に行くと、道路交通標識やミラーなど折れたものが、まだまだ残っていました。

私は初めて石巻・東松島に行き、被災者の方々と交流できる貴重な体験をさせていただきました。私が思っていた被災地とは違い、復興しつつある場所や、全く進んでいない場所もありました。来年も参加して、石巻や東松島がどのくらい変わるのかを見に行きたいと思いました。

来年度も参加するのでまた宜しくお願いします。



3年W組 H. T. (さいたま市立与野西中学校出身)

私は今回のボランティアに参加したことで、石巻・東松島に訪れたのは2回目になり「浦和学院生」としてボランティアに参加することや、訪れることは最後でした。私は以前、2年前の冬に、石巻ボランティアに参加させていただきました。そのため、以前と比べてどのような変化をしているのか、テレビ等で報道されていることが少なくなりましたからこそ、自分の目や肌で実際に感じたいという目的を持ってボランティアに参加をし、4日間現地で過ごしてきました。この4日間、現地いた中で、沢山の地元の方々の優しさや温かさ、埼玉県にはない自然の環境、海の幸に囲まれていたと思います。

4日間の活動の中で特に印象に残っていることが2つあります。1つ目は、2日目の朝に訪れた大川小学校です。私は大川小学校を訪れるのは2回目でした。たとえ「2回目」と言ったとしても、実際見ると改めて津波という自然災害というものの怖さや恐ろしさが建物から伝わり、その当時どんな思いで生徒さんや教師の方、避難している方々は過ごしていたのか。考えるだけで、建物を見ているだけで涙が自然と出てしまいました。“当たり前が当たり前でない”と教えてくれる場所だと思いました。

2つ目は、3日目に行った、ワカメ・メカブ作業のお手伝いをしたことです。海のない埼玉に住んでいる私にとっては本当に貴重な経験でした。普段自分たちが食べている、ワカメやメカブは、人の手で作業されていること、時間や手間がかかっていることを実際に自分が行き、身をもって感じました。また、漁師さんや作業している方々のほとんどが高齢者の方であったため、少子高齢化の現実というものを実際に見て感じました。私はこの作業をするまで、ワカメとメカブは別の根からできていると思っていましたが、一本の根からワカメとメカブが区別されていることを知ることができ、ひとつの発見になりました。

このボランティアを通し、私はたとえ自分の場所や地域が被災しても、その場所に対する愛を持ち続けられることを地方の方々から、人の温かさやぬくもり優しさを感じ、学ぶことができました。

学んだこと感じたことを忘れず、4月から新たな環境に入っていく中で、出会った人を大切にしていき、常に今に感謝して過ごせるようにしていきたいです。

最後に浦和学院生としてこのボランティアに参加することができ本当に良かったです。

